

<書評>

森本隆男・矢倉伸太郎共編

『転換期の日本酒メーカー

—灘五郷を中心として—』

(森山書店、1998年)

大貝 健二

清酒、日本酒、地酒、一度は飲んだことがあるのではないかと思う。日本酒のイメージも、飲むと酔いするというようなネガティブなものから、癒し効果があるというようなポジティブなものまで様々である。このような日本酒を製造している酒蔵は、その数を減らしてきているとはいえ、大規模資本メーカーから小規模家族経営のものまで、現在日本全国で1,500社以上存在する。

しかし、近年日本酒業界を取り巻く環境は、目まぐるしく変化している。生産段階においては、酒造りの担い手であった季節労働者の高齢化及び減少に伴う、年雇従業員による日本酒製造や機械化による省力化、流通段階では、大手流通資本を主導とした流通再編、小売段階においては、規制緩和が進む中でSM、DS、CVSなどの酒販部門への参入が進み、そして消費段階でのビール・発泡酒などの消費量の増大に伴う酒類間競争の激化による日本酒の消費量の低迷が深刻なものとなっているのである。

本書『転換期の日本酒メーカー—灘五郷を中心として—』では、以上のような環境の中に置かれている日本酒メーカーの中で、日本酒の主産地として、歴史的にも名を馳せている灘五郷の酒造メーカーに焦点を当てたものである。灘五郷とは、兵庫県南東部の阪神間の海岸線に点在している、今津郷、西宮郷、魚崎郷、御影郷、西郷という五つの郷を総称した呼び方である。灘五郷には、「ワンカップ大関」で知られている「大関」、高見盛関をCMに起用したことで注目を浴びた「日本盛」、全国的に名前が知られている「白鹿」、「白鷹」、「沢の鶴」などの日本酒メーカーをはじめとして、現在約40の酒蔵によって日本酒生産が行われている。

本書の構成は以下の通りである。第1部：日本酒業界の概観(第1章 地場産業としての日本酒業界—灘日本酒メーカーのケースを事例として—、第2章 灘日本酒メーカーの経営問題)第2部：灘日本酒メーカーの経営問題(第3章 灘日本酒メーカーの生産と技術の変化、第4章 灘日本酒メーカーの労働変化、第5章 灘日本酒メーカーの流通変化)第3部：酒造業界の展望(第6章 酒造業界の産業政策、第7章 グローバル化と灘日本酒メーカー、第8章 情報化と灘日本酒メーカー、第9章 灘日本酒メーカーの人材開発、第10章 灘日本酒メーカーの震災復興とリスク

マネジメント)

以上の構成から明らかなように、本書は、灘日本酒メーカーの現状と動向に焦点を当て、経営という側面からの分析に力点を置き、現代の構造変化を捉えることを試みている。以下、本書の内容を簡単に紹介してみたい。

第1部：日本酒業界の概観では、第1章で、日本酒業界を中小企業が全体の95%を占めるという構造を明らかにし、灘五郷での酒造りを、宮水と優良な原料米という資源立地に基づく地場産業として位置づけた上で、現代抱えている問題点を列挙し、そして日本酒業界の展望を行っている。また第2章では、第二次世界大戦以後の日本酒産業の経営の歴史を生産統制、四季醸造、近代化といった事柄を中心に描かれている。

第2部：灘日本酒メーカーの経営問題においては、第3章で、灘日本酒メーカーにおける生産と技術変化に関して、戦後の復興期から発展期まで、高度経済成長期に伴う増産期、オイルショック以後から現代までの低迷期という3つの時期区分に分けて論じられている。第4章では、灘日本酒メーカーの労働力の変化、特に季節労働者の減少の問題について書かれている。高度経済成長期以降の産業構造の変化に伴う、農家の減少や農業の後継者不足という問題とあまって、酒造りを担う季節労働者が高齢化、減少しているという問題に直面し、灘日本酒メーカーは、季節労働者に替わる通年醸造社員の採用、醸造作業の近代化、そして工場移転という対策をとるようになったということが事例を交えて述べられている。第5章では、灘日本酒メーカーの流通変化について書かれている。近年の生販三層(メーカー・卸・小売)にわたる流通構造変革が進行する中で、灘メーカーの物流対応として共同配送について触れられ、また近年新しく出てきている産地直送(蔵元直送)の動きなどが取り上げられている。

第3部：酒造業界の展望においては、第6章で、統制された酒造業の歴史を振り返り、原料米統制の中で三倍增醸酒が誕生したことや、桶取引が盛んになったことが書かれている。また、これからの課題として、小手先の対応ではなく、根本的な対応をしていくことの重要性を論じている。第7章では、日本酒の輸出入及び、日本酒の海外生産に関して書かれている。近年の日本酒の輸出状況、そして灘日本酒メーカーの事例を用いて、1970年代から海外生産を行うようになる背景、海外生産の現状、海外の販売市場の現状が書かれている。第8章では、情報化ということに着目して灘日本酒メーカーの現状が書かれている。灘五郷地区においては、情報化の必然性を感じている酒造メーカーが多いにも拘わらず、情報処理機器の普及率やネットワーク利用率が十分なレベルにはないということの原因を、企業規模の小ささによる資本・人材不足、そして、家業的・生業的な経営体質によるものとみてお

り、情報化に対する意識改革が必要であると論じられている。第9章では、人的資本に焦点を当て、人材確保及び人材育成の現状と課題について事例研究を交えながら論じられている。そして、本書の最後の章でもある第10章においては、阪神大震災の被害にあった灘日本酒メーカーの震災被害状況の実態、震災からの復興過程、リスクマネジメントを、灘五郷の酒造メーカーへ行ったアンケート調査の基に述べられている。

本書の特徴は、まず上述したように、日本酒の主産地である灘五郷に位置する日本酒メーカーの現状と動向を、主に経営側面から捉えようとしていることである。この点は、本書のはしがきでも書かれているように、酒文化と歴史の研究が多い中で、本書が持つ特徴であるといえる。日本国内でも有数の規模を誇る大手日本酒メーカーが多数存在し、日本酒業界を先導しているともいえる灘五郷地域の日本酒メーカーの動向を知るためには、本書の発刊が1998年とやや以前ではあるが、充分に一読に値するといえるのではないだろうか。また、酒造企業の阪神大震災で被った被害状況やリスクマネジメントの記述に関しては、木造蔵が多い全国の酒造企業に対して、酒造経営の問題として、震災・風水害などの天災からの危機管理を促しているということも、本書の特徴の一つであるといえる。

とはいえ、これから清酒製造業を研究していこうと考えている筆者にとっては、いくつかの疑問が生じた。それらを以下に取り上げてみたい。

まず第1に、本書の記述に関してであるが、全体を通じて、大手メーカーの動向を中心に論じられているということである。「酒造メーカーのほとんどは中小企業である」、あるいは、「灘の酒造産地は中小企業を中核としながらも、大企業との混成のみられる集積地である」という記述が第1章において見られるが、全体の事例としては、大関、白鹿等の大手メーカーが中心であり、現在でも約40の蔵が存在する灘五郷の酒造メーカー全体としての動向が見えてこないのである。日本酒業界が転換期を迎えたという認識に立って書かれているのであれば、大手メーカーの動向だけではなく、灘五郷に位置する小規模あるいは零細規模の企業の動向をもっと明らかにしてほしい。

また第2に、上記の内容と関連することであるが、全国の酒造メーカーの動向、特に地酒ブームの流れに乗って小規模であるにもかかわらず、酒造業界を取り巻く環境が厳しい中で毎年の経営を行っている中小企業の位置づけを単に地酒メーカーとするのではなく、灘の日本酒メーカーと比較をしたうえで、灘メーカーの現在の動向や問題点というものを明らかにしたい。そうすれば、主産地として知られる灘五郷の酒造メーカーのうちで、比較的中小の蔵が抱える現状の問題点、そして、全国の他の蔵の動向との比較によって、灘の

大手メーカーであるがゆえに生じている問題点等が明らかにになり、全体としてまさにタイトルどおり、灘五郷を中心とした転換期の日本酒メーカーを描くことが出来たのではないかなと思うからである。

第3に、日本酒業界の歴史的な行動として、桶取引があげられるが、本書全体を通じて桶取引に関する記述が少ないのではないかなということである。桶取引という行為自体が良い・悪いということをここで論じようとしているのでは全くない。ただ、原料である米が統制下にあったという時代背景の中で、第二次世界大戦からの経済復興過程、そしてその後続く高度経済成長期において、桶取引を通じて、大手メーカーと中小メーカーとの間で系列関係が築かれた点は無視できないからである。このことは、筆者が実際に高知県の酒造業者に対するヒアリングにおいて耳にしたことである。高知県においては、①全く桶取引を行わなかった業者、②桶取引を通じて県内業者間で系列関係を構築した業者、③桶取引を通じて県外の手企業と取引関係を結んだ酒造業者、④県外企業から桶買いを行っていた業者が存在していた。全国的に見て製造数量、販売数量の大きくない高知県の酒造業者でさえ、桶取引を行っていたのであるから、日本酒の産地とされる灘酒造メーカーにおいても桶取引を行っていたであろうということは推測可能である。この戦後の酒造業の桶取引を媒介として構築された系列関係が、1980年代以降の日本酒の消費量が低迷していく過程において、その後中小メーカーが存続できるか否か重要なファクターになっているのではないかなと思われる。このようなことから、現在の日本酒業界を分析するには、桶取引の実態を客観的に明らかにする必要性があるのではないだろうか。

以上、疑問点と関連させて、これから酒造業の研究を行っていこうとする筆者の問題意識を述べさせて頂いたが、このような意識が芽生えるに至ったのも、本書が刺激的な作品であるということに他ならない。さらにこれから筆者自身の研究における問題意識を明確にすることを目標にし、さら本書以上に刺激的な研究を行っていけるような研究者になることを強く心に誓いつつ、筆をおくことにしたい。

(京都大学大学院経済学研究科)